

なか ふ ごう

富山市中富居遺跡

発掘調査報告書

—大型ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

1999

富山市教育委員会

なか ふ ごう

富山市中富居遺跡

発掘調査報告書

—大型ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

1999

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市上富居地内に所在する中富居遺跡の発掘調査概要である。
- 2 発掘調査は、店舗建設（大型ショッピングセンター）に先立つもので、施工主ユニー株式会社の依頼を受けて、富山市教育委員会が主体となって実施した。
- 3 調査期間
　現地調査　平成10年3月30日～平成10年6月8日
　遺物整理　平成10年6月9日～平成11年1月31日
- 4 調査にあたり、ユニー株式会社、株式会社熊谷組の協力を得た。
- 5 調査は富山市教育委員会生涯学習課学芸員　近藤頸了、小黒智久、同嘱託安達志津が担当した。
本書の編集・執筆は各担当者が行い、各々の責は文末に記した。
- 6 調査にあたり、文化庁、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。
- 7 調査の実施から報告書作成までの間に次の各氏から有益な助言と協力を頂いた。記して謝意を表したい。
　相沢 央 池野正男 小林昌二 宮田進一（五十音順、敬称略）
- 8 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
 - (2) 遺構の表記は次の記号を用いた。
　溝：SD、土坑：SK、ピット：Pである。
 - (3) 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 9 墨書き器の解説は、新潟大学人文学部小林昌二教授による。
- 10 写真図版12の赤外線写真は、小林教授、新潟大学大学院現代社会文化研究科学生相沢央氏の撮影による（所属は1999年1月時点）。

目　　次

I　遺跡の位置と環境 1
II　調査にいたる経緯 2
III　調査の概要 3
IV　まとめ 23
写真図版 25
報告書抄録 37

遺物実測図
の凡例



赤彩



黒色処理



油燈

写真図版目次

図版1	遺跡周辺の航空写真
図版2	調査区全景
図版3	調査区（建物部分）上層・下層
図版4	調査区（建物部分）第1区
図版5	調査区（建物部分）第2区
図版6	調査区（建物部分）遺構
図版7	調査区（市道拡幅部分）第4区
図版8	調査区（市道拡幅部分）第4区
図版9	作業風景
図版10	遺物写真
図版11	遺物写真
図版12	遺物写真

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

中富居遺跡は、富山市の市街地から北東方向4kmほどに位置する。西には神通川、東には常願寺川が北流し、両河川が形成した標高9~10mの複合扇状地上に立地する。複合扇状地上には自然堤防や微高地が多く形成され、縄文時代晚期以来多くの遺跡が営まれている。

縄文時代晚期後半には豊田遺跡が営まれる。1m45cm×1mの隅丸長方形のプランを呈する深さ25cmの土坑内および周辺の地山上から、穂つみ具の可能性が強い「穂つみ状石器」片が縄文時代晚期の土器と共に出土し、接合している（富山市教育委員会1974、以下、「市教委」とする）。

同様に、縄文時代晚期後半～終末の豊田大塚遺跡では沼の肩部から石刀や中空土偶、御物石器、石鏃、有孔球状土製品が出土し、その多くが破損していることから、本遺跡は水辺での廃棄・祭祀に関係する遺跡の可能性が考えられている（市教委1998）。

弥生時代後期になると、この複合扇状地上には多くの遺跡が形成される。豊田大塚遺跡では沼の肩部から法仏（後期）～月影式（終末期）の廃棄された土器が多量に検出され、祭祀の可能性も想定されている。この他、井戸やさらし場、木道も検出されている（市教委1998）。

ちょううちょう塚は豊田大塚遺跡の北西約500mに位置する。封土内から口縁部を欠く焼成後底部穿孔の壺形土器などが出土している。藤田富士夫・駒見和夫両氏はこの壺形土器を被葬者に係る祭祀儀



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

国土地理院平成2年9月1日発行 1:25,000地形図「上市」、同平成8年8月1日発行 1:25,000地形図「富山」を合成

札に用いられたものと捉え、本遺跡を「発生期古墳」と理解している（藤田・駒見1981）。その後藤田氏は、今日的視点では「弥生墳丘墓」とも呼ばれるものと評価している（藤田1998）。宮町遺跡では祭祀を行った井戸が6基と井戸を取り巻くと思われる堀が検出され、弥生後期の環濠集落の可能性も想定される（古川1995）。小西北遺跡でもほぼ同時期の土坑が1基検出されている（古川1995）。

飯野新屋遺跡では弥生時代終末（月影II式）期の掘立柱建物や溝、井戸などが検出されている（市教委1984・1986・1987・1995）。井戸（1993年度調査区SE03）は類例の少ない丸太削抜き式で、井戸側材（スギ）が一部遺存していた。底面から80cm程度上から月影II式期でも後半段階の土器が多く出土している。これらは井戸廃絶に伴う祭祀に用いられたとされている（市教委1995）。中富居遺跡でも試掘調査で月影II式期の土器捨て場と考えられる遺物包含層が確認されている（市教委1990）。

古墳時代～奈良時代にかけての遺跡は顕著でないが、平安時代には豊田大塚遺跡で祭祀跡が確認されている。溝内から人面墨書き土器や人形（1点には「神服小年賀」と墨書きされている）、斎串が検出され、出土土器から9世紀後半の祭祀と想定される（市教委1998）。豊田大塚遺跡の北方1kmほどには大型掘立柱建物や石製鎧帶、斎串、多量の墨書き土器などが出土した8世紀末～9世紀後半の官衙跡の可能性が考えられる米田大覚遺跡が位置し、両遺跡間の関連性が注目される（小林1997）。宮町遺跡でも平安時代の掘立柱建物・側溝をもつ幅5.6mの道路・堀などが確認されている（古川1995）。

室町時代には小西北遺跡で居館跡が検出されている。堀の内側には土壘が築かれている。館部分はわずかしか調査されていないが、井戸などが検出されている。井戸内からは漆塗りの小皿が出土している。そこには「三ッ盛り 丸に三頭右巴」の文様が描かれており、注目される（古川1995）。宮町遺跡でもほぼ同時期で堀を巡らした居館跡が2軒並んで検出されている（古川1995）。以上みてきたように、本地域は縄文時代晩期から中世への発展過程をある程度うかがえる地域である。（小黒）

Ⅱ 調査に至る経緯

中富居遺跡は昭和63年に行われた富山市教育委員会の分布調査によって確認された。中富居・上富居・鍋田・上飯野地区の327,000m²に広がって所在する。これまでに数回行われた試掘調査によって、古墳時代前期から中世にかけての集落跡と周知されていた。平成元年の分譲宅地造成に伴う試掘調査では、約420m²の遺跡の所在が確認され、公園として保存された。

平成9年1月、富山市上富居地内の38,435m²に、大型ショッピングセンター「フェアモール富山」の建設計画が発表された。遺跡地図で確認の結果、開発予定区域全域が「中富居遺跡」に該当していることが明らかになり、協議の結果、市教委が主体となって7月に試掘確認調査を実施した。調査は、開発区域すべてを対象範囲として46箇所の試掘トレーンチを設定し、同年7月8日から7月16日までの7日間で行った。調査の結果開発区域の東側2,262.5m²に遺跡の広がりを確認した。

調査により開発区域の地形および土質は、東側に黄色シルトを地山とする微高地があり、そこに溝、穴等の遺構が確認された。西側に移るにつれ、土質は黒色・青灰色・白色の粘質土壤に変化し、東から西へ向かって沼状に落ち込んでいるものであった。また、全体に地表面下1mの地点より湧水が見られ、東側から西側へ移るにつれ噴出する水量が増していった。西側の青灰色粘土の地山を持つ部分の区域は自然堆積の土層のみ確認され、遺構は認められなかったことから、遺跡範囲は開発区域東側に限定された。この試掘結果に基づき、施工主ユニー株式会社と工事計画について調整の結果、建物にかかる470m²および、隣接する市道拡幅部分225m²について、発掘調査を実施することで合意に至ったため、4月1日付で協定を締結し、現地調査に着手した。（近藤）

III 調査の概要

1 調査の経過

発掘調査は、平成10年3月30日より事前準備を開始した。調査区の設置、重機による表土排土を行い、4月6日の熊谷組による現場作業員への安全説明会の後、本格的な発掘調査に取り掛かった。

調査は現場の湧水が激しいため、建物部分470m²を先行して表土排土し、調査区周辺に排水溝を掘削した後、建物にかかる調査区を南北で2区に分け、それぞれ第1区、第2区とし、遺構確認を行った。

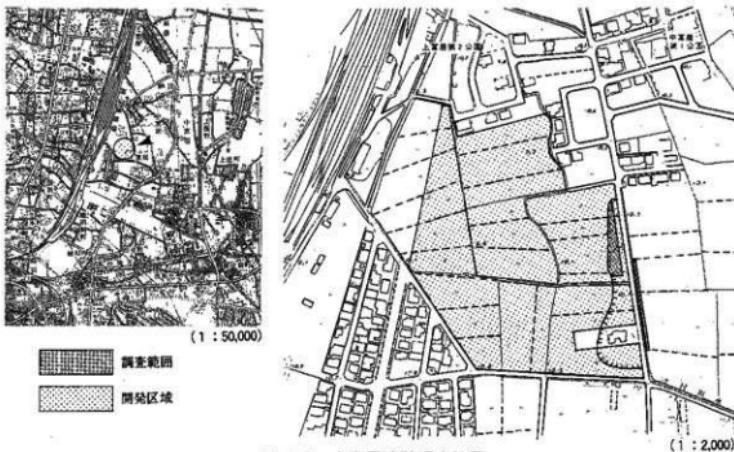
第1区（建物部分南部調査区）には過去の粘土採取穴などの攪乱が数ヶ所あり、攪乱部分をサブトレーニチとして掘り下げたところ、下層の存在を確認した。第2区の遺構所在層は上層1層のみで、第1区の上層、第2区の遺構発掘を終了した時点で1回目の空中写真測量を行った。

5月7日より第3区、第4区として市道拡幅部部分の表土排土・調査を開始、同時に第1区下層の調査を行った。第1区下層では沼跡の肩部を検出した。調査区全域について土層断面実測・遺構実測・遺物実測、取り上げ・写真撮影を行い、遺構発掘の完了をもって、第1区下層、第2・3・4区を併せて2回目の空中写真撮影を実施した。現地調査は6月8日まで行い、6月9日で引渡しを完了した。
(近藤)

2 自然地形

調査区は南北に細長い形状である。標高は約10mで現況は平坦地であるが、旧地形は第1区上層遺構検出面で、北から南へ、西から東へ緩やかに傾斜しているのが確認された。試掘調査によって調査区の西側に低湿地の広がりが確認されており、沼に囲まれた微高地に集落が営まれていたと考えられる。

また、第1区下層面で検出された沼跡は、西肩部で調査区を南北に切って走り、東に向かって落ち込む。主な遺構はこの沼跡が堆積した上に形成されていた。
(近藤)

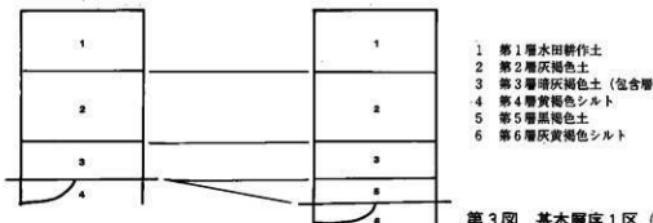


第2図 中富居遺跡調査範囲

3 基本層序

1層のみの第2、第4区では耕作土より遺構面まで約70cmをはかる。第1層水田耕作土、第2層灰褐色土、第3層の暗灰褐色土は遺物包含層で、土師器・須恵器が出土した。第4層は黄褐色シルト層で、この面に上層の遺構が検出された。上層の遺構覆土は暗茶褐色を呈していた。

第1区下層では第3層の下に第5層として薄い黒褐色土層、その下に第6層として灰黃褐色シルト質の地山があり、この面で下層遺構（覆土は暗灰褐色粘質土）と沼跡の肩部（黒色粘質土ベルト）を確認している。6層までの深さは約70~80cmをはかる。搅乱を掘り下げたサブトレーンチでは、その下に灰色土層、黒色粘質土層があり、青灰色粘土質の基盤層が堆積しているが、さらにその下部にも黒色粘質土層が確認され、この地域は当時低湿地であり、部分的に河川氾濫等の堆積を受けて微高地が形成されるが、周囲の沼地の浸食によって低湿地化を幾度か繰り返したと推測される。（近藤）



第3図 基本層序1区（1/20）

4 遺構

第1区上層・下層、第2区、第4区の3区域から平安時代（9世紀初~末）から中世にかけての溝群を検出した。

第1区

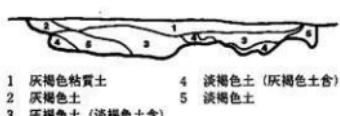
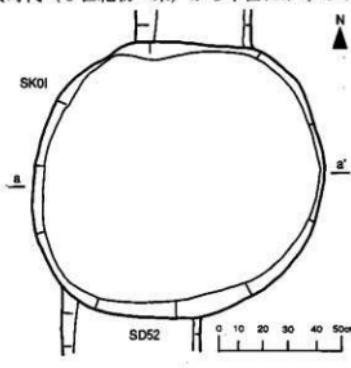
上層と下層の2つの遺構面を持つ。壁材に用いる粘土を探査した搅乱穴によって調査区の約半分が荒らされており、遺構の検出および確認は、この探査穴の隙間の本来の堆積が残っている部分に限られた。

確認された遺構は土坑4基、溝84条である。これらの遺構は1区南端から調査区西側壁までを南北方向に横切る黒褐色の沼跡の肩部を切って形成されている。

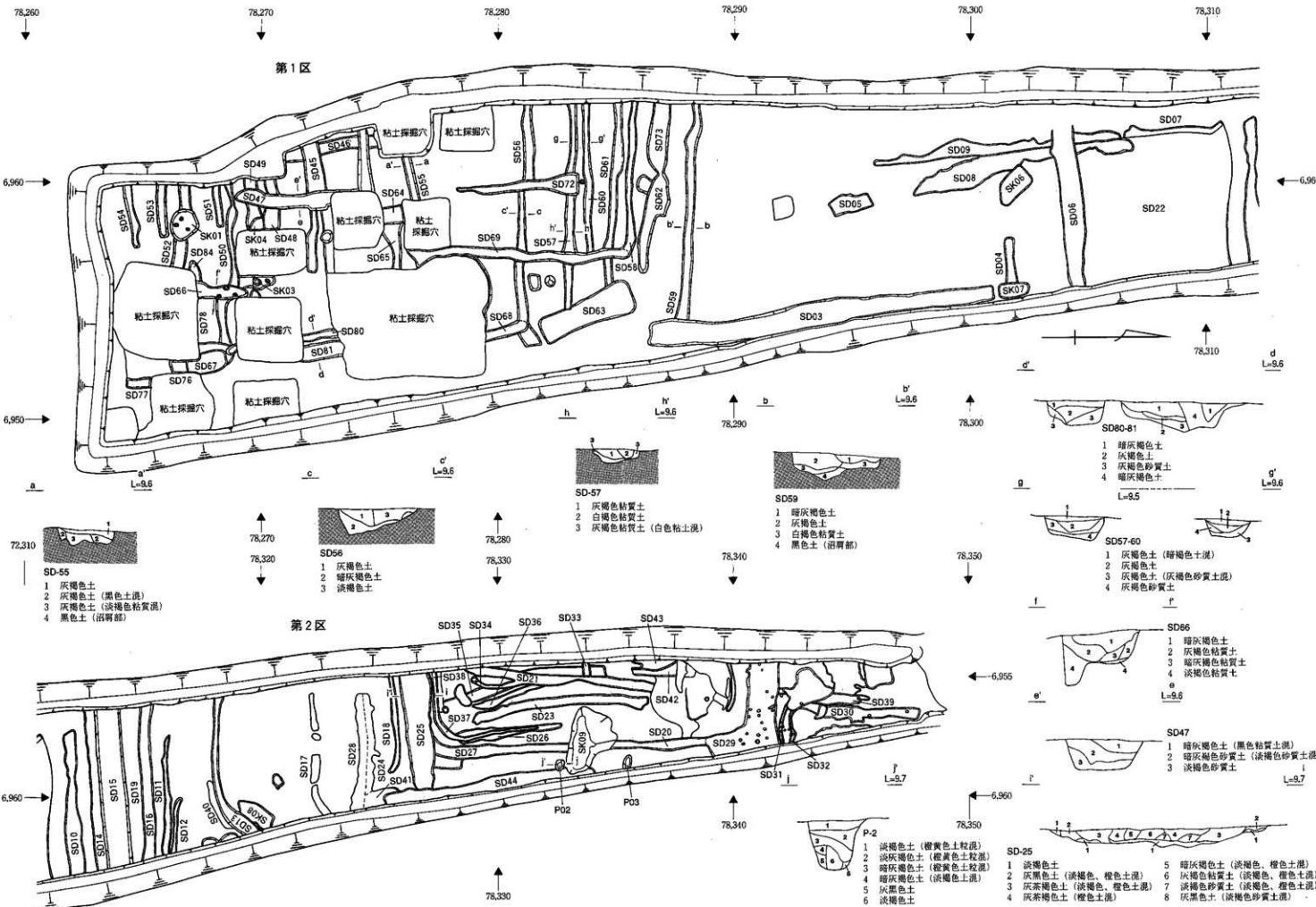
土坑

S K01

直径1.2m、深さ0.15mの円形を呈する。覆土は灰褐色粘質土でSD52を切って掘りこまれている。遺物は覆土上面から土師器片が2点出土した。付近からの流入と思われる。



第4図 SK01実測図（1/20）



第5図 第1・2区全体図（小字は国土座標系第Ⅲ系の値）

溝群

上層の溝は暗茶褐色の遺構覆土を持ち、深さが5cm~10cmと浅い。遺構底に凸凹があり、耕作に係わる遺構と考えられる。遺物は遺構検出面で珠洲片が出土しており、中世に属する。上層遺構覆土からは擾乱による混入と思われる下層・第2区と同様の遺物も出土している。

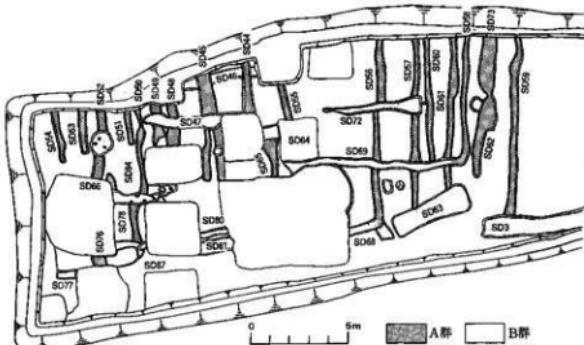
下層の溝は大別して主軸方向が東西に伸びるA群と、南北に伸びるB群に分けられる（第6図）。A群溝25条は、灰褐色等の灰色系覆土を持ち、どれも幅が30cm前後と規格が整えられた印象を受ける。検出された沼跡の肩部を切ってほぼ並行に並ぶことから、同時期に使用された排水施設と考えられる。東端はいずれも擾乱および2次堆積を受けているため不明瞭である。一方、B群溝はA群溝に直交し、暗灰褐色の遺構覆土中に土器片等の遺物を多く含むものが多い。溝の立ち上がりはA群よりもやや緩い。規則性をもって設定されたA群溝に対して、溝の幅・深さに統一性ではなく、溝の収束も不明瞭である。

これらの溝のうち、
SD69は特に集中して
遺物が出土した。土器
片が溝の上部及び周辺
部に寄り集まつた状況
で多数出土しており、
遺構覆土の堆積も河川
氾濫等により一時に埋
没した状況を呈してい
るため、流路と考えら
れる。

A・B群の各溝とも
出土遺物の年代観に差
はあまりなく、ほぼ9
世紀代に属する。検出
状態・切り合い等から、
規則性を持って沼肩に
作られたA群溝が埋没
した後、その堆積を削る
形でB群溝が形成され、
更に河川氾濫等により
短期間で埋没したと
考えられる。（近藤）

第2区

第1区と比べて不明
瞭な遺構が多い。検出
面・遺構覆土の差から
その中でも微妙な時期
差が与えられる。



溝A群

遺構番号	方向・向き
SD45	N-82'-E
SD48	N-84'-E
SD49	N-83'-E
SD50	N-87'-E
SD51	N-83'-E
SD53	N-84'-E
SD54	N-82'-E
SD55	N-78'-E
SD56	N-90'-E
SD57	N-90'-E
SD59	N-90'-E
SD65	N-90'-E
SD74	N-84'-E

溝B群

遺構番号	方向・向き
SD78	N-82'-E
SD83	N-88'-E
SD84	N-77'-E
SD52	N-88'-W
SD58	N-87'-W
SD60	N-87'-W
SD61	N-87'-W
SD62	N-81'-W
SD71	N-87'-W
SD73	N-87'-W
SD75	N-87'-W
SD76	N-89'-W

第6図 第1区 下層溝群

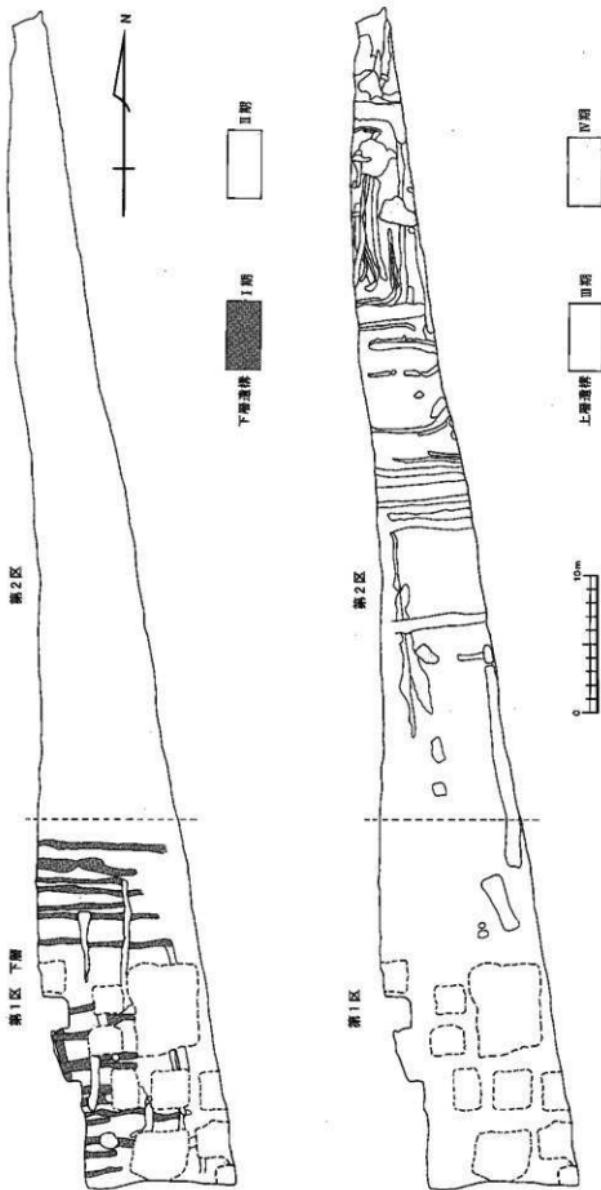
表1 第1区上層・第2区 溝群一覧

遺構番号	方向・向き	出土遺物	段階	切り合ひ関係
SD01	N-19° -W	土師器：壺、鍋、碗 須恵器：壺、坏壺、瓶 珠洲	Ⅲ期	SD56、57、58、59、60、61、72、73の上層
SD02	N-9° -W	土師器：壺、鍋、碗 須恵器：壺	Ⅳ期	SD71の上層 浅く底が荒れる
SD03	N-6° -W	土師器：壺、鍋、碗 須恵器：壺、坏壺、瓶 珠洲：片口鉢	Ⅳ期	SD63を切る 浅く、底が荒れる
SD04	N-84° -E		Ⅳ期	SD03に切られる
SD05	N-15° -W	土師器：壺、鍋、鍋	Ⅲ期	
SD06	N-85° -E	土師器：壺、鍋	Ⅳ期	SD08・09を切る
SD07	N-10° -W	土師器	Ⅳ期	
SD08	N-16° -W	土師器：壺、鍋 須恵器：壺	Ⅳ期	SD06・SK01に切られる
SD09	N-7° -W		Ⅳ期	SD06に切られる
SD10	N-90° -W		Ⅳ期	西端不明瞭
SD11	N-88° -W		Ⅳ期	西端不明瞭
SD12	N-82° -W		Ⅳ期	西端不明瞭
SD13	N-74° -E		Ⅳ期	南へ緩く張を描く 支流あり
SD14	N-85° -E		Ⅳ期	SD05・SD40を切る
SD15	N-86° -E	土師器：赤彩焼	Ⅳ期	
SD16	N-86° -E		Ⅳ期	SD14・19を切る
SD17	N-84° -E		Ⅳ期	東端が北へ蛇行する 道中不明瞭
SD18	N-84° -E		Ⅳ期	東端が南へ蛇行する 撥乱受ける
SD19	N-84° -E		Ⅳ期	SD15・16に切られる
SD20	N-3° -W	土師器：壺、鍋 須恵器：壺	Ⅳ期	SD29、SK04に切られる SD23につながる
SD21	N-4° -E	土師器 須恵器：壺、瓶	Ⅳ期	SD35・36、SK09・11を切る SD23に切られる
SD22	N-84° -E	土師器：壺、鍋、赤彩焼、小型壺 須恵器：壺	Ⅳ期	幅4mで荒れた底をもつ 耕作跡か
SD23	N-5° -W		Ⅳ期	撥乱によってプラン不明瞭
SD24	N-88° -W		Ⅳ期	SD28・41を切る
SD25	N-83° -E		Ⅳ期	撥乱によってプラン不明瞭
SD26	N-6° -W	土師器：壺、鍋 須恵器：壺 磁器	Ⅳ期	SD37を切る
SD27	N-1° -W		Ⅳ期	SD25、SK04に切られる
SD28	N-88° -W	土師器：壺、鍋 須恵器：鏡、瓶	Ⅳ期	SD24に切られる
SD29	N-85° -W		Ⅳ期	SD20を切る 撥乱受ける
SD30	N-7° -E	土師器：壺、鍋、碗 須恵器：壺	Ⅳ期	SK06、P06に切られる
SD31	N-79° -W	土師器：壺、鍋	Ⅳ期	SK07に切られる
SD32	N-86° -W		Ⅳ期	SK07に切られる
SD33	N-83° -E		Ⅳ期	SD09に切る
SD34	N-12° -E		Ⅳ期	SD35を切る P05に切られる
SD35	N-17° -W	土師器	Ⅳ期	SD34、SK10に切られる SD36を切る
SD36	N-17° -W	土師器	Ⅳ期	SD35に切られる
SD37	N-81° -E 半ばより N-5° -W		Ⅳ期	SD38を切る SD26に切られる
SD38	N-89° -E		Ⅳ期	SD37に切られる
SD39	N-8° -E	土師器：小形壺	Ⅳ期	SK07に切られる
SD40	N-67° -E		Ⅳ期	SD13に切られる
SD41	N-14° -W	土師器 珠洲：壺	Ⅳ期	SD24に切られる
SD42	N-1° -W		Ⅳ期	SK11に切られる 撥乱受ける
SD43	N-0° -W		Ⅳ期	撥乱受ける
SD44	N-8° -W		Ⅳ期	SD41を切る SK04に切られる

表2 第1区下層 溝群一覧

遺構番号	方向・向き	出土遺物	段階	所属群	切り合い関係
SD45	N-82° -E	須恵器: 壺	I期	A群	SD46に切られる SD74・75に分かれる
SD46	N-13° -W		I期		SD44・45に切られる
SD47	N-10° -E	土師器: 壺、碗、内黒 須恵器: 壺	II期	B群	SD45・48・49を切る
SD48	N-84° -E	土師器: 壺、小型壺 須恵器: 壺	I期	A群	SD47に切られる 搾乱受ける
SD49	N-83° -E		I期		SD47に切られる 搾乱受ける
SD50	N-87° -E		I期	A群	SD66に切られる
SD51	N-83° -E		I期	A群	沼肩上で不明瞭
SD52	N-88° -W		I期	A群	SD13に切られる 搾乱受ける
SD53	N-84° -E	土師器: 壺、小型壺	I期	A群	沼肩上で不明瞭 搾乱受ける
SD54	N-82° -E	土師器: 壺、鍋、小型壺 須恵器: 壺	I期	A群	沼肩上で不明瞭 搾乱受ける
SD55	N-76° -E	土師器: 壺、鍋 須恵器: 杯、瓶	I期	A群	搾乱受ける
SD56	N-90° -E	須恵器: 杯	I期	A群	SD68につながる SD69・72に切られる
SD57	N-90° -E	土師器: 壺 須恵器: 杯	I期	A群	SD69・72・73に切られる
SD58	N-87° -W	土師器: 壺	I期	A群	SD69・72に切られる
SD59	N-90° -E	土師器: 壺 須恵器: 杯	I期	A群	SD69・72に切られる SD71につながる
SD60	N-87° -W	土師器: 壺	I期	A群	SD69・72に切られる
SD61	N-87° -W	土師器: 壺、鍋、碗、小型壺 須恵器: 杯	I期	A群	SD69・72に切られる
SD62	N-79° -W	土師器: 壺 須恵器: 杯	I期	A群	SD73につながる
SD63	N-27° -W	土師器: 壺 須恵器: 杯			浅く、底が荒れる
SD64	N-8° -W	土師器	II期	B群	SD65に切る 搾乱受ける
SD65	N-90° -E	土師器: 盆、壺、小型壺 須恵器: 杯	I期	A群	SD64に切られる 搾乱受ける
SD66	N-0° -E	土師器: 壺、小型壺 須恵器: 杯、壺蓋	II期	B群	SD64・50・78を切る
SD67	N-11° -E	土師器: 壺、碗 須恵器: 壺、瓶	II期	B群	搾乱受ける
SD68	N-21° -W	土師器: 盆、壺 須恵器: 杯	I期	A群	SD56とつながる
SD69	N-0° -E	土師器: 壺、鍋、碗、小型壺 須恵器: 杯、壺、杯、壺蓋転用鏡	II期	B群	SD56・57・58・59・60・61を切る
SD71	N-87° -W	土師器: 壺	I期	A群	SD59とつながる
SD72	N-4° -W	土師器: 壺、赤彩壺、小型壺 須恵器: 瓶、壺、杯、壺蓋転用鏡	II期	B群	SD56・57・58・59・60・61を切る
SD73	N-87° -W	土師器: 壺 須恵器: 瓶	I期	A群	SD72に切られる SD62につながる
SD74	N-84° -E	土師器: 壺 須恵器: 壺、壺蓋転用鏡	I期	A群	SD45から分かれる
SD75	N-87° -W	土師器: 壺	I期	A群	SD45から分かれる
SD76	N-45° -W	土師器: 壺 須恵器: 杯	I期	A群	SD75を切る 搾乱受ける
SD77	N-12° -W	土師器: 壺	II期	B群	搾乱受ける
SD78	N-82° -E	土師器: 壺	I期	A群	SD66・67・SK19・20に切られる
SD80	N-15° -W	土師器: 壺	II期	B群	搾乱受ける
SD81	N-15° -W	土師器: 壺、小型壺 須恵器: 杯、壺蓋	II期	B群	搾乱受ける
SD82	N-9° -E	土師器: 壺、小型壺 須恵器: 杯	I期		SD50・SK15・P06に切られる 搾乱受ける
SD83	N-88° -E		I期	A群	SD46を切る 搾乱受ける
SD84	N-75° -E	土師器: 壺	I期	A群	SD66に切られる

第7図 第1・2区 上層・下層遺構



大別すると上層遺構には淡灰色の砂質の遺構覆土を持つ S K06・07・09、S D06・13・15・16・29、P 01・02・03が含まれる。中世に属する。水路として明瞭なものは S D15で、これも両サイドに古い段階の溝 S D14、19があり、それらの上から掘り込んで形成されている。同時期の S D6・16とともに3条とも主軸は東西方向である。

その下層に S D22を始めとする溝群が含まれる。細く浅い溝が多く確認され、互いに切り合い、底面が凹凸なものが多数を占める。深さは5~10cmと浅い。S D22は幅4m、全長は調査区外に延びているため不明だが、農耕に関する耕作痕と考えられる。覆土の観察から1区上層と同時期と考えられる。

調査区1区及び2区の各々の遺構について詳細は表1・2に記した。出土遺物から時期を検討すると、1区下層は9世紀初~中頃、1区下層包含層は同じく9世紀初~末、1区上層及び2区は中世以降の年代が与えられる。しかし、遺構覆土及び検出面から更に詳細な時期差が見られる。それをまとめたものが第7図である。古段階の遺構からI~IV期とし、分類を試みた。I・II期は9世紀代に含まれ、III・IV期は中世期に含まれる。

I期の遺構は溝A群を中心とし、1区に偏っている。II期の遺構はB群に分類された南北方向の溝および土坑・穴でI期と若干の時期差が与えられる。今回の調査では1区I・II期の遺構と、これから述べる4区の遺構と平面上で直接のつながりは認められなかったが、包含層・覆土の状況から対応関係にあると考えられる。

(近藤)

第3区

遺構は確認されなかった。このことから、第2区で検出された S D29など東西方向に伸びる溝は本地区までは及ばないことがうかがわれる。遺物包含層中には須恵器・土師器片がわずかに含まれているものの、小片のためそれらの時期比定は困難である。

(小黒)

第4区

遺構面が1面検出された。遺物包含層は第1区下層及び第3区と同様の暗色系土である。このことから、遺構面は層位的に第1区下層及び第3区のものに対応すると思われる。検出遺構は溝20条、土坑7基、柱穴3基である。遺構は3地点にわかれ、それぞれa・b・c地点と呼称する(第10図)。

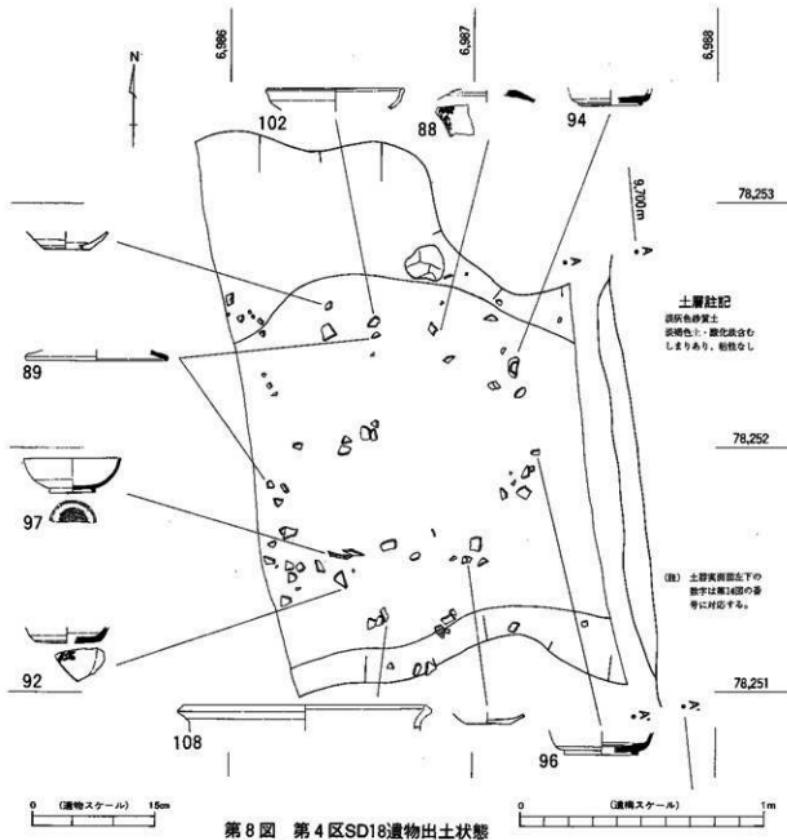
各遺構から出土した遺物の年代観に大きな開きはなく、いずれもおよそ9世紀代のなかに収まる。しかし、本地区的遺構覆土を詳細に観察すると、大きくて暗褐色・黒褐色・暗灰色砂質土、暗灰色粘質土といった暗色系のものと灰褐色・淡灰色砂質土といった灰色系のものの2つにわかれる。このことから、これらの遺構はほぼ同時期(9世紀代)に利用されてはいるものの、微妙な時期差があつたことがうかがわれる。

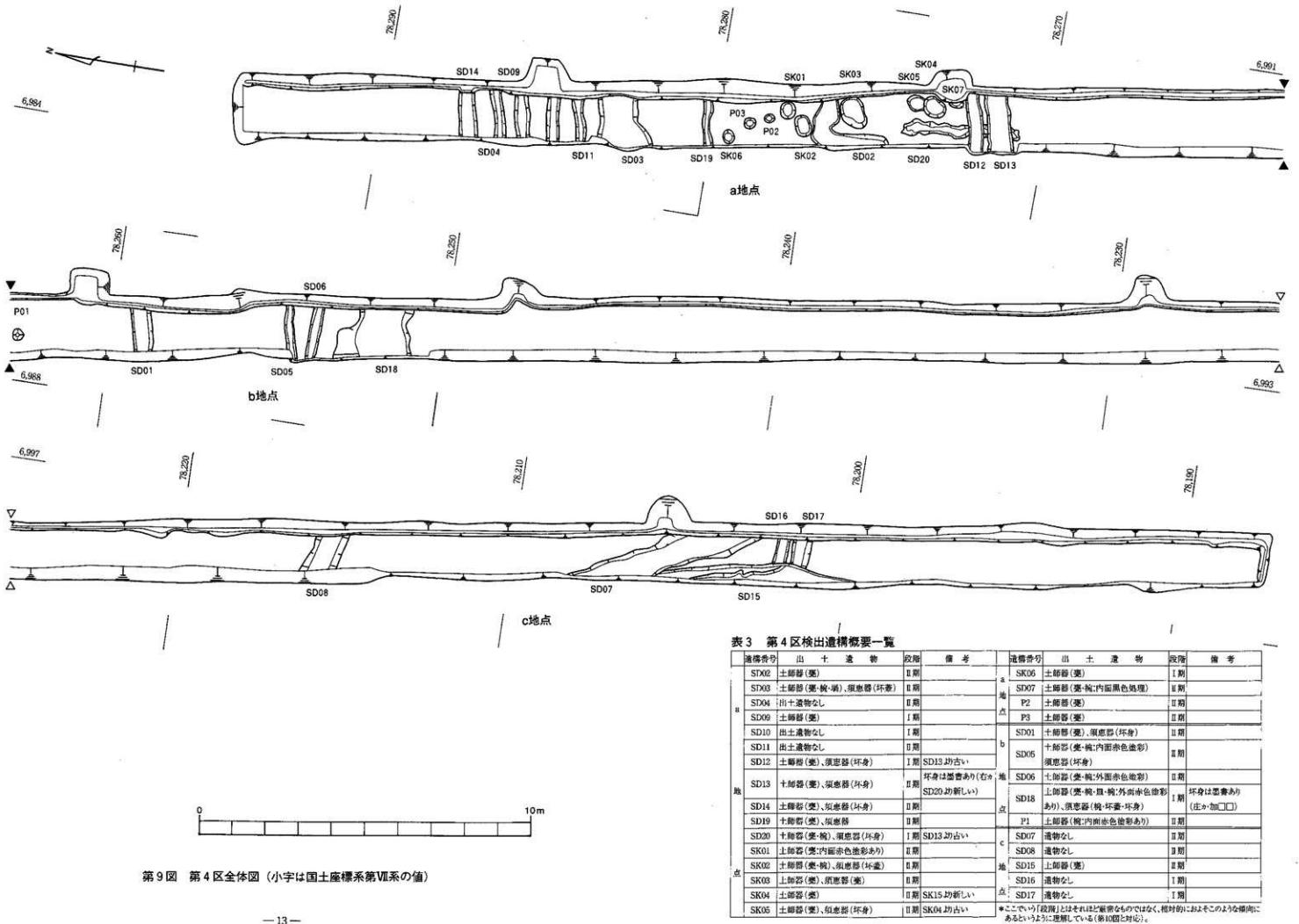
a地点では S D12・13・20、S K04・05が同一面上で重複している。検出面上では、S D20が埋没したのちに S D12・13が掘削されていること、並びに S K05が埋没したのちに S K04が掘削されていることが確認され、それは土層断面上での切り合い関係とも符合する。S K04・05の覆土は両者とも暗灰色粘質土であるので比較の対象にはなり得ないが、S D20及びそれより新しい S D12の覆土が灰褐色砂質土であり、S D20より新しい S D13の覆土が暗灰色砂質土であることは注目に値する。

c地点でも S D07・15、S D15・16・17が重複している。検出面上では S D16・17が埋没したのちに S D15が、その後に S D07が掘削されたと判断され、それは土層断面上での切り合い関係とも矛盾しない。S D07・15の覆土は両者とも暗色系であるが、S D16・17のそれは灰褐色土である。

検出面上で古いと判断される遺構の覆土が2例とも灰色系であることは示唆的である。遺構の切り合ひ関係及び覆土の差異からは、灰色系覆土を伴う遺構が古く、暗色系覆土を伴う遺構が若干新しい可能性が考えられる。では、上述の推定は出土遺物の年代観と対応しているのであろうか。基準となるSD20からは土器片が18点出土しているが、壺の胴部・頸部破片ばかりで詳細な時期比定が可能なものは認められない。また、SD16・17からは遺物が出土していない。

覆土から若干古相を呈する遺構と考えられるSD18からは比較的多くの土器片が出土している(第8図)。それらは9世紀前半代～後半まで幅をもつことから後半代の利用が推定され、一見、先の想定と矛盾するかのように思われる。しかし、暗色系覆土を伴う遺構からの出土遺物を検討すると、灰色系覆土を伴う遺構より確実に新しい時期の遺物を伴っているとは必ずしも言えない。





以上から、本地区的遺構には土器の型式差に表れない若干程度の時期差があり、それが覆土の差に表れていると推定したい。出土遺物の年代観を考慮に入れつつ、覆土の差異から時期ごとに分類したものが第10図・3表である。時期は第1区下層に準じている。

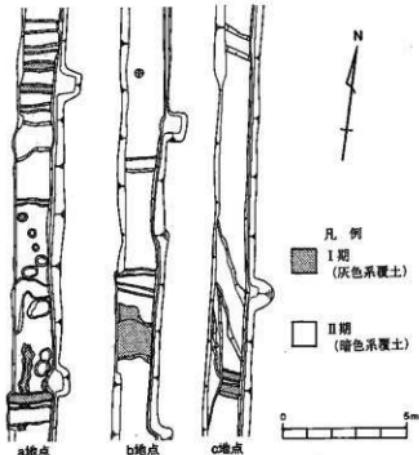
若干古相を呈すると思われる遺構は3地点とも認められるが、a地点に比較的多く集中する。a地点のSD20の主軸方向が南北である以外、若干古相を呈すると思われる溝群はいずれも東西方向に走行する。SD20は長さ3.5mで、底面にも傾斜が認められない。さらに、他の溝群と比べて、幅は同規模であるが平面形態が不整形な印象を受ける。

b地点のSD18は深さ10cm程度の浅い溝である。小片ながら土器片が比較的多く出土している。覆土は淡灰褐色砂質土の単層で一気に埋没したことがうかがわれるが、比較的上部から出土するものと、下部から出土するものの2者にわかれり傾向にある（第8図）。

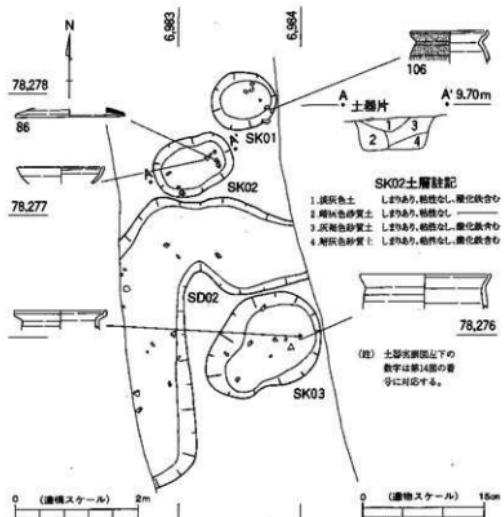
なお、SD18の底面付近からは「庄カ」・「加□□」の墨書き土器片が2点出土している。越中では8世紀後半の庄家関連遺跡とされる大島町荒畠遺跡（富山県埋蔵文化財センター1991）から「庄」の墨書き土器が5点、8世紀後半～9世紀前半代の祭祀場とされる大島町北高木遺跡で「庄」（池野1997:65）や「佐見御庄」・「西庄」の墨書き土器（高橋1995:134・135）が、9世紀後半代の庄家関連遺跡とされる入善町じょうべのま遺跡（富山県教育委員会1975）で「西庄」の墨書き土器が6点出土している。

これらの例とは同列に扱えないものの、本遺跡に「庄カ」の墨書き土器が存在することは注目される。

若干新相を呈すると思われる遺構もa地点に集中する。a・b地点の溝群は主軸方向が東西方向なのに対し、c地点のそれは主軸方向が若干北に振れる。a地点では溝の他に柱穴2基、土坑6基が確



第10図 第4区 相対的新旧関係模式図



第11図 SK01~03、SD02遺物出土状態（小字は国土座標系第VII系の値）

認されている。P02とP03の柱間は60cm程度である。両者が同一の建物の柱穴であるのかどうかは不明だが、両者の柱材抜き取り痕内覆土はいずれも暗灰色砂質土である。

明確に埋めたと考えられる土坑は認められず、全て自然堆積である。土坑中からは接合関係のない土器片が出土している（第11図）。SK04・05・07の覆土は単層の暗灰色粘質土であり、長期間水が溜まっていたことがうかがわれる。

a 地点の遺構群は一見したところ第1区の遺構群に対応するかのようにみえる。しかし、第1区の溝群は調査区東端まで伸びずに収束したり、南折しており、第1区と第4区a地点の溝群は一連のものではないと考えられる。溝群がどちらの方向に向かって流れているかは判断が難しい。底面の標高から判断すると、a地点のSD02は東から西に向かって、c地点のSD07・15は北から南に向かって流れていたようである。

遺物包含層は基本的に暗色系土の単層であるが、b地点のみ暗灰色砂質土の下に暗褐色砂質土が堆積している。層位的には暗灰色砂質土が他地点の遺物包含層と対応し、暗褐色土はそれより古いことになる。両者の中に包蔵されている遺物に時期差は認められず、ほぼ同時期である。層位的には単層である暗色系の遺物包含層も厳密には複数層に分けられ、また砂質土が多い。

遺物包含層や遺構覆土、出土遺物の検討からは、以下のような当地の変遷がうかがえる。旧地形である沼が堆積し、ある程度平坦になったのちに跡が形成される。跡の形成は河川氾濫等の間隙をぬって継続し、それが遺物の時期差に表れない遺構覆土の差を生じている。その後、それほど時間が経つ間もなく、氾濫等により再度土砂が堆積し、集落は終焉した。なお、第1区で確認された沼の覆土と推定される黒色粘質土がc地点SD16・17付近で確認されており、第1区下層のデータと合わせ、旧地形の一端が復元可能である。(小黒)

5 遺物

第1区下層遺構（第12図1~30、写真図版10）

須恵器（1~18）

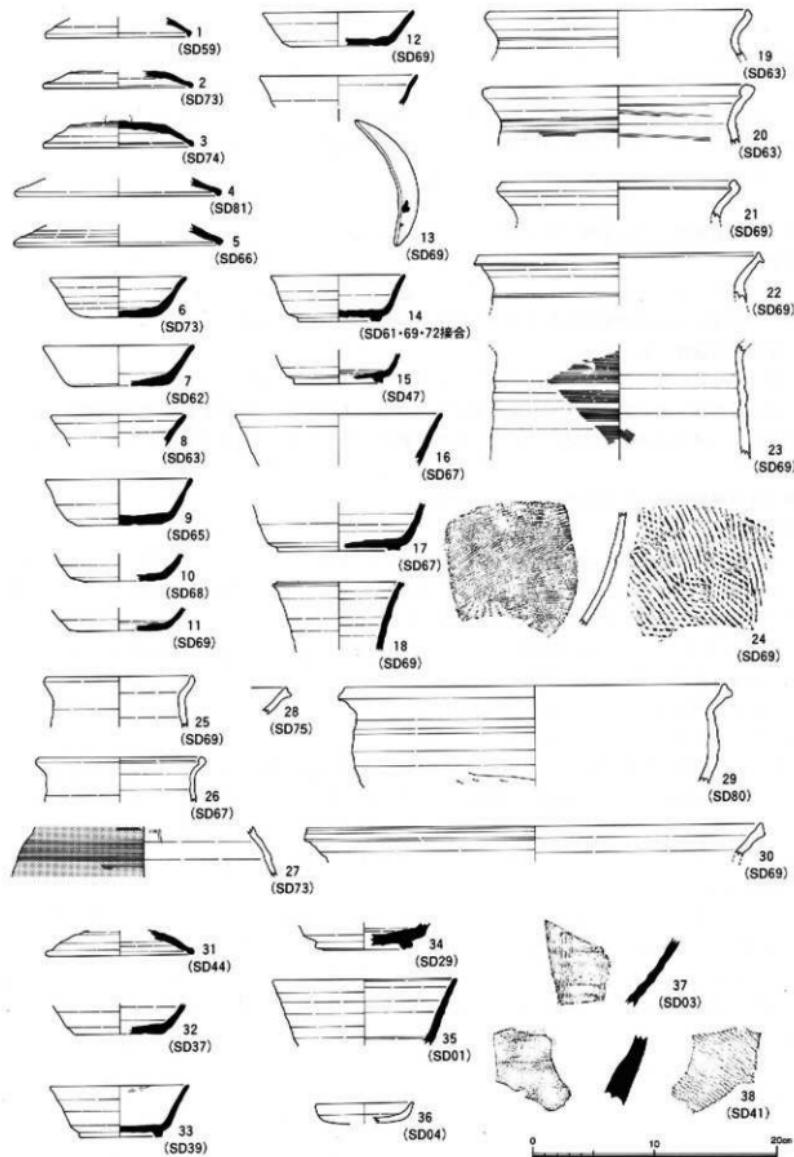
1~5は壺蓋である。1~3は器壁が薄く、口径が12cm前後と小さい。2は然成不良で白色を呈する。3はほぼ完形（SD74出土破片と下層包含層出土破片が接合）でつまみ破損部分と内面中央部が使用により磨耗している。つまみが剥落した後、転用されたものと思われる。4・5は口径が16~17cmあり、厚手である。4の端部はやや扁平な三角形状で、5は幅広に肥厚する。

6~12は無台の壺Aである。底部切り離しは全てヘラ切り手法による。7は体部が厚めで直線的に斜め上方にのびる。9は厚めの底をもち器高が大きい。10・11・12は薄手の底で体部の開きが大きく、白っぽい色を呈するものが多い。13は墨書き土器で体部外面にわずかに墨書きが見える。

14~17は高台付きの壺Bである。14・15は口径が小さく器壁も薄手である。14はSD61・69・72出土破片が接合した。内面に墨痕が残る転用硯である。16・17は法量の大きいタイプで、17は扁平な高台がつき、底部内面は磨耗している。18は長頸壺である。

土師器（19~30）

19~24・28は甕である。19は口縁端部を上につまみ出すタイプ、20・21は口縁端部がやや角張つて肥厚する。22は端部を面取りし、下端を引き出すタイプである。23は胴部の上半で、外面にカキメをほどこし、内面はロクロナデ、一部にハケ目を施す。外面は一面に炭化物が付着する。24は胴部下半で、外面に平行叩き目、内面は放射状当具痕をハケ目によって消している。本遺跡では、叩き目や当具痕を残す破片は少なく、ヘラケズリやハケ目によって消しているものが多い。28は外面全体に炭



第12図 第1・2区構造出土遺物 (S=1/4)

化物が付着する。

25・26は小型壺である。口縁端部は25は上に引き上げ、26は内側に巻き込む。ともに内外面にロクロナデを施す。27は外面に赤彩を施した壺で、外面にカキ目、内面はロクロナデと一部にハケメを施す。29・30は鍋である。29・30とも内外面に炭化物が付着し、特に29の外面下部はこげつきとなって付着している。

第1区上層遺構・2区遺構（第12図31～38、写真図版10）

須恵器（31～35）

31は坏蓋で端部が丸く肥厚する。32は坏Aで底部はヘラ切りである。33～35は坏Bである。

33は口縁端部内面に油煙が付着する。34は体部立ち上がり部分に稜をもつ。

中世以降の遺物（36～38）

36は土師質小皿で、平底で短く内弯して立ち上がる口縁部に一段ナデを施す。37は珠洲焼の片口鉢である。体部が直線的で御し目が密であることから、吉岡編年（吉岡1994）のⅢ期程度と思われる。38は同じく珠洲の壺体部の破片である。外面は細めの平行叩き、内面は当具痕の上からなでつける。

第1区下層包含層（第13図39～69、写真図版10）

須恵器（39～52）

39～41は坏蓋である。39は内面中央部が使用により磨耗している。40は端部を下に折り曲げ、頂部に回転糸切り痕を残す。つまみが剥落した痕跡がある。頂部と縁辺部との境目付近に二条のロクロケズリを施す。41は笠状に広がり端部を巻き込む。

42～46は坏Aである。42は器壁が厚めで内底面が磨耗している。42～44は底部切り離しはヘラ切りによると思われる。45・46は体部が大きく開くタイプである。46の底部はなでつけられているが形状から見て回転糸切りとみられる。立山町上末釜谷4号窯と高岡市末窯の製品に46と酷似するものがある。ともに9世紀後半に位置付けられている。

47、48は坏Bである。47は台径が6.0cmと小型で、内弯気味に体部が立ち上がる。48は小さな高台がつき、口縁部内面上半と内底面が磨耗している。47・48ともに底部切り離しはヘラ切りによる。

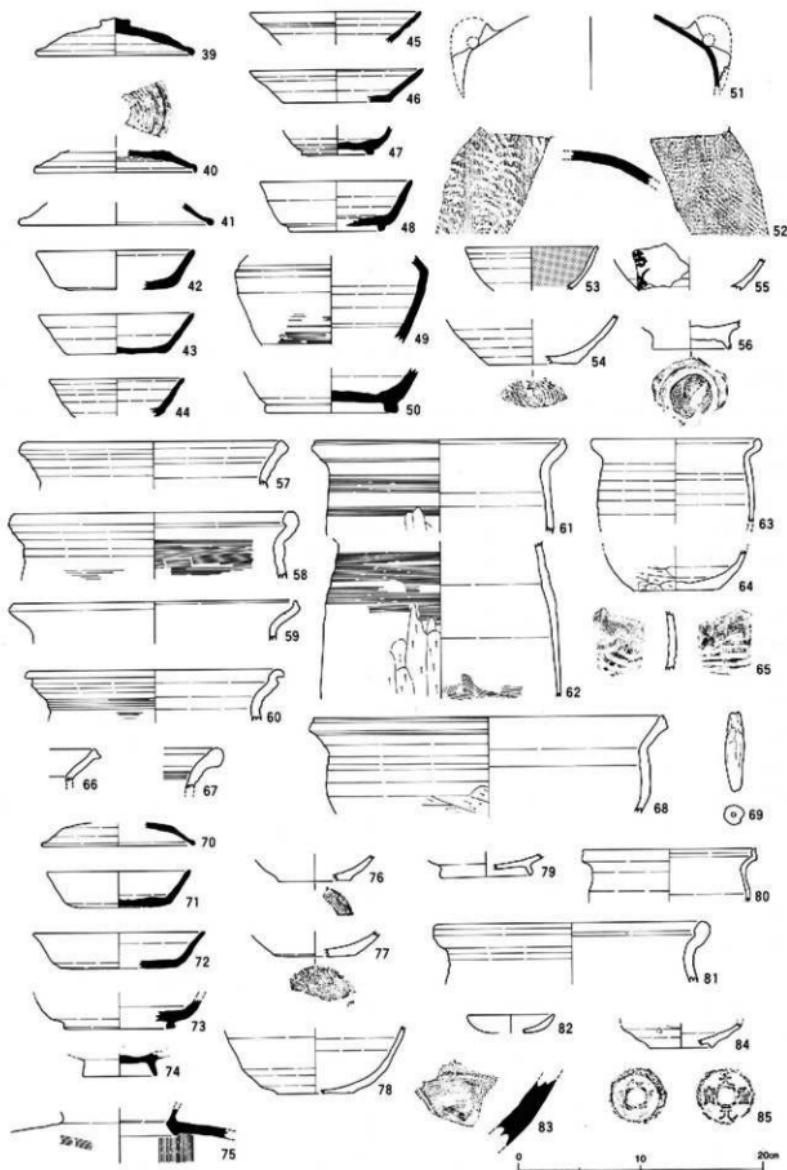
49は壺類の体部、50は壺類底部で外底面はロクロナデによる丁寧な調整である。51は双耳瓶の肩部で小型の耳がつく。52は横瓶の体部破片で、内外面とも叩き、当具痕の上からカキ目を施す。

土師器（53～68）

53～55は椀である。53は内面に赤彩がみられ、体部内面に煤が付着する。55は墨書き土器で、体部に逆位で二文字が書かれる。56は高台付きの皿である。54・56はともに底部回転糸切り無調整である。

57～62、65・66は壺である。口縁端部の形態は、内側に折り返し肥厚するもの（57・58）、端部をつまみ上げ内側に若干膨らむもの（59）、つまみ上げた先を外反させ外面に凹線が入るもの（61）、さらに外反部分が大きくなるもの（60）などがある。57・58の内面には全体に炭化物が付着する。62・65は壺体部破片である。62は外面カキ目、下半に上からヘラケズリ、内面はロクロナデで下半にハケ目を施す。内面には炭化物が付着する。65は、外面は叩き目の上からヘラケズリ、内面は同心円当具痕の上からハケ目を施す。

63・64は小型壺である。63は内面口縁部と外面全体に炭化物が付着する。64は、外面は体部・底部ともにヘラケズリ、内面はロクロ目が残る。67・68は鍋である。68は口縁端部外面に凹線が入る。体部下半はヘラケズリを施す。69は細身の土錐である。長さ4.8cm、最大径1.2cm、孔径0.18～0.28



第13図 第1・2区 包含層出土遺物 (S=1/4、69はS=1/3、85はS=1/2)

cmを測る。

第1区上層包含層・2区包含層（第13図70～85、写真図版10）

須恵器（70～75）・灰釉陶器（79）

70は蓋である。薄手で口縁端部がわずかに丸く肥厚する。71・72は壺Aである。71は底部ヘラ切り後ナデツケ、内面は中心部までロクロナデを施す。72は砂粒が多く胎土は粗い。73は壺Bで体部の立ち上がり部分よりかなり内側に高台がつく。74は高台付きの皿である。底部はヘラ切り後なでつける。灰白色を呈する。75は排水溝出土の横瓶である。外面は叩き目をカキ目やナデツケによって消す。内面はカキ目、ナデを施す。79は灰釉陶器。搅乱土中から出土した。施釉された部分が残っていないが、灰白色の堅緻な胎土で底部外面はロクロケズリを施す。9世紀後半に属する。

土師器（76～78、80・81）

76～78は土師器の椀である。78は磨滅が激しいが全て回転糸切りである。78は内面を丁寧に磨く。80は搅乱土中出土の小型壺で口縁部が屈曲する。81は壺である。

中世以降の遺物（82～85）

82は土師質小皿で胎土は白色を呈する。口縁は内湾しながら立ち上がり、端部は尖る。底部に向かって器壁が薄くなる。83は珠洲焼の片口鉢である。84は越中瀬戸焼の鉄釉向付で削りだし高台である。85は銅鏡である。北宋銕の「天聖元寶」（真書、1023年初鋤）である（水井1996）。

第4区遺構（第14図86～108、写真図版11）

須恵器（86～98）

86～89は壺蓋である。端部は丸く肥厚するものが多い（86・89）。ロクロケズリを施すものは見当らず、全体にロクロナデを施す。88は墨書き土器で内面に「加カ□□」の文字が書かれる。

90～93は壺Aである。92・93は墨書き土器で、92は底部外面に「庄カ」、93は体部外面に「右カ」の墨書きがある。底部はヘラ切りである。

94～96は壺Bである。94は非常に小さな高台が付き、95は口径の小さいタイプである。94・96は内底面が滑らかに磨耗している。底部は全てヘラ切りにより切り離す。

97は内湾する体部に小さな高台が付く椀で底部に糸切り痕を残す。富山県内でこのタイプの器形の出土例は管見では無い。高台はやや低いものの、東海地方10世紀代の灰釉陶器の椀に似る。

98は広口壺の頸部である。一条の沈線が入る。

土師器（99～108）

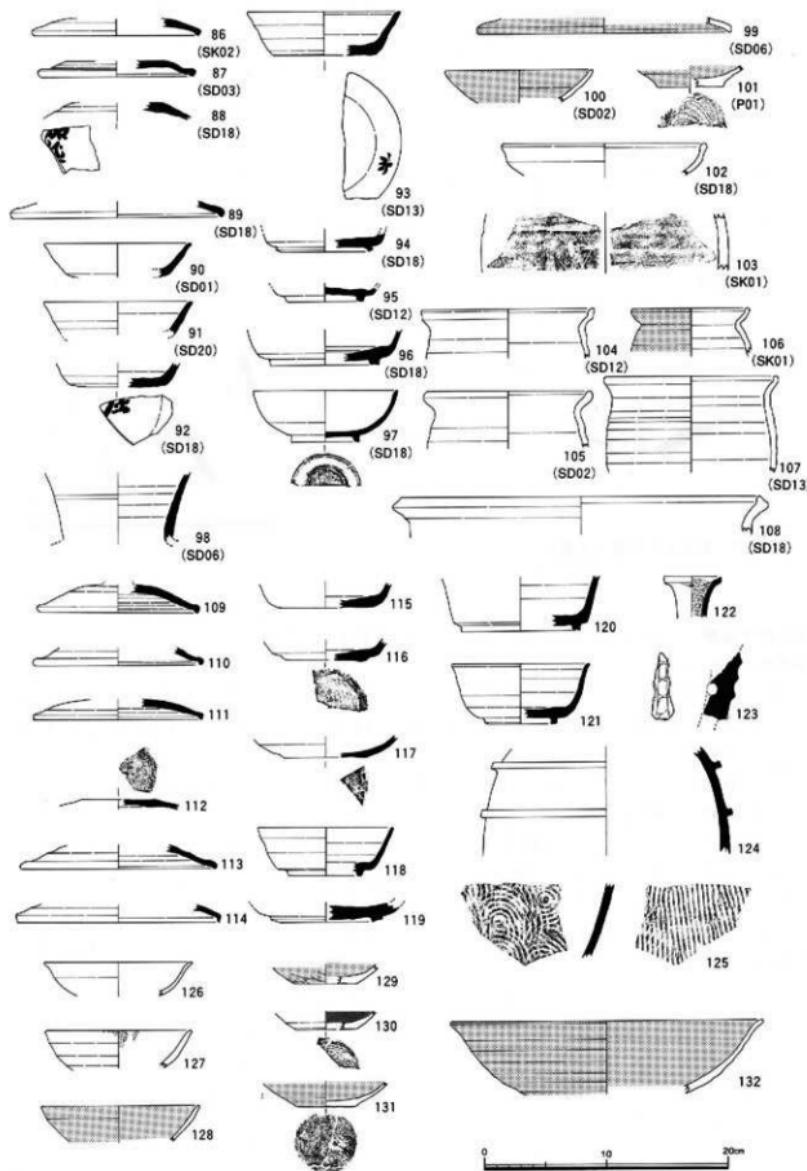
99～101は赤彩土器である。99は蓋あるいは高杯の脚部と思われる。内外面ともミガキを施す。胎土中に海綿骨針を含む。100・101は椀である。内外面ともロクロナデ、101は底部回転糸切りである。

102は壺あるいは高壺か。ゆるやかな稜をもって内湾する。

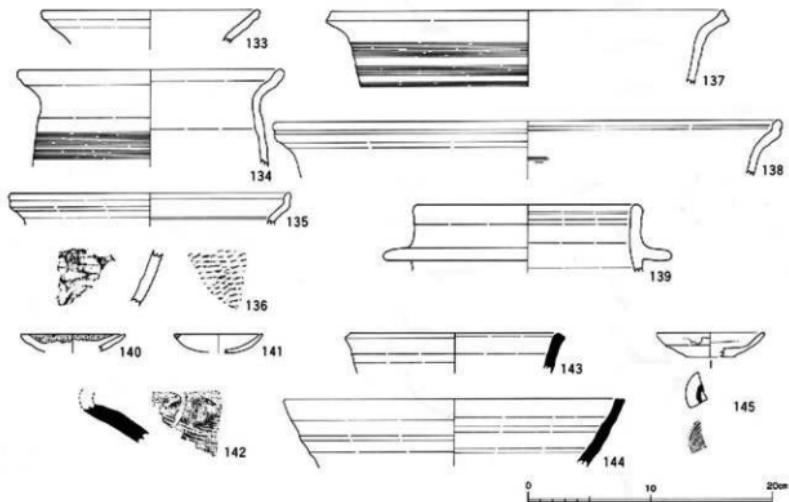
103は壺体部で外面に×のヘラ記号がある。外面はロクロナデの上から下半にヘラケズリ、内面はロクロナデの上から下半にハケメを施す。

104～107は小型壺である。口縁端部は上方に向かって一度折れ丸くおさめるもの（104）、若干尖らせてそのまま終わるもの（105）、丸く巻き込むもの（106・107）などがある。106は外面に赤彩を施す。口縁部内面には炭化物が付着する。小型壺に赤彩を施すのは珍しい。107は外面と口縁部内面に炭化物が付着する。

108は鍋である。口縁端部を斜め内方につまみあげる。外面に炭化物が付着する。



第14図 第4区遺構・4区包含層出土遺物 (S=1/4)



第15図 第4区包含層出土遺物 (S=1/4)

第4区包含層 (第14図109~132・第15図133~145、写真図版11)

須恵器 (109~125)

109~114は壺蓋である。端部の形態はいくつかのタイプがあるが、全て端部は小さく器壁は薄い。109・111はヘラ切り後、頂部までロクロナデを施す。112は頂部回転糸切りである。113は転用硯で内面に墨痕が残る。

115・116は壺Aである。底部は、115はヘラ切り、116は回転糸切りによる切り離しである。117は底部回転糸切りの椀で、器壁は薄い。

118~121は壺Bである。120は体部立ち上がり部分に稜を持ち、直線的に上にのびる。121は体部が内弯して立ち上がり、口縁部で外反する。小さな高台が付く。

122は小型壺の口縁部で、灯火器として使用されたのか、内外面に油煙が付着する。123は双耳瓶の耳で鶏頭状を呈する。124は双耳瓶体部である。二条の突帯が巡る。125は壺の体部破片である。

土師器 (126~139)

126~131は椀である。127は口縁部内外面に油煙が付着する。灯火器として使用されたものであろう。128・129・131は赤彩土器である。129の外面は底部・体部ともヘラケズリを行なう。130は内面黒色土器である。132は内外面とも赤彩された大型の椀で、高岡市美野下遺跡に類例がある。

第15図133~136は壺である。136の内面は扇状当具痕とみられる。137・138は鍋である。139は羽釜で、富山市栗山椿原遺跡で小型品が出土しているが富山県内では珍しい。

中世以降の遺物 (140~145)

140・141は土師質小皿で灯明皿として使用されたものである。142~144は珠洲焼。142は壺頸部の付け根に記号文と思われる刻文がある。143は壺の口縁部、144は片口鉢である。145は越中瀬戸、鉄釉の縁釉皿で、底部は回転糸切りである。宮田分類（宮田1988）の皿Eである。底面に墨書きがある。

IV まとめ

遺構

中富居遺跡は平成2年に行なわれた試掘確認調査で、遺跡東側に古墳時代を主とした集落跡の存在を示唆する結果が得られていた。今回の調査区は遺跡の西側にあたり、東側の高台に比べてやや標高が下がり、南から北、東から西へと傾斜した地形である。大型ショッピングセンター建設にあたって数年間休耕地となっている間、地下からの湧水により葦が生い茂る低湿地と化していた。水田として整備されるまではこのような姿であったと想定される。このため、黒色の泥炭層、青色・白色粘土層が厚く発達しており、調査でも沼地が幾度か形成・堆積した痕跡、流路跡が確認された。調査区には、粘土探掘による後世の搅乱穴が無数に穿たれており、検出された遺構のうち、搅乱の影響を受けないものは少數である。

今回の調査では、平安時代を中心とした溝群を確認した。検出された遺構は、深い沼がシルト質土壤によって埋没した地山上に集中して形成されている。住居跡など集落の主体となる遺構が発見されなかつたため、集落外周域部と考えられる。集落中心部から排水対策として84条もの溝が作られたと考えられる。

(近藤)

遺物

遺物の時期について大まかに述べると、第1区下層遺構出土遺物は、9世紀初めから中頃に中心がある。第1区下層包含層出土遺物は9世紀初めから終わり頃に属し、後半にその中心がある。第1区上層包含層、第1区上層遺構、2区遺構は中世以降の時期に属し、古代の遺物が紛れ込んだものと思われる。第4区遺構出土遺物は9世紀初めから9世紀末まで、第4区包含層は9世紀初めから10世紀半ばまでと、中世の遺物を含み、9世紀後半に中心がある。全体としては、9世紀代を主とする遺跡といえる。

土器の構成について簡単にふれてみたい。小片が多いため破片数をカウントし、表4にあげた。須恵器と土師器では土師器のほうが多くその半数以上を煮炊具が占め、食膳具が少ない。食膳具全体に占める須恵器と土師器の割合を見ると須恵器34.3%に対して土師器65.7%となり、同じ9世紀代の村落遺跡である立山町浦田遺跡の様相とは大きく異なる。また、9世紀初めから中頃を中心とする1区下層遺構のみの破片数では、食膳具全体に対して須恵器84.8%、土師器15.2%となり、まだ食膳具に

表4 出土品の構成比較（破片数括弧内は全体に占める割合、＊印は食膳具全体に占める割合）

	須 恵 器			土 師 器			総 計
	食 膳 具	貯 藏 具	計	食 膳 具	煮 炊 具	計	
富山市 中富居遺跡全体	427 (11.2%) 34.3%*	130 (3.4%)	557 (14.6%)	808 (21.5%) 65.7%*	2432 (63.9%)	3250 (85.4%)	3807
同 中富居遺跡 第1区下層遺構	56 (13.5%) 84.8%*	14 (3.4%)	70 (16.9%)	10 (2.4%) 15.2%*	335 (80.7%)	345 (83.1%)	415
同 中富居遺跡 第4区包含層	224 (9.8%) 25.5%*	79 (3.4%)	303 (13.2%)	655 (28.6%) 74.5%*	1330 (58.1%)	1985 (86.8%)	2288
立山町 浦田遺跡	477 (37.9%) 82.0%*	239 (19.0%)	716 (56.9%)	105 (8.3%) 18.0%*	439 (34.8%)	544 (43.1%)	1260

浦田遺跡のデータについては宇野雅夫（1989a）より引用した。

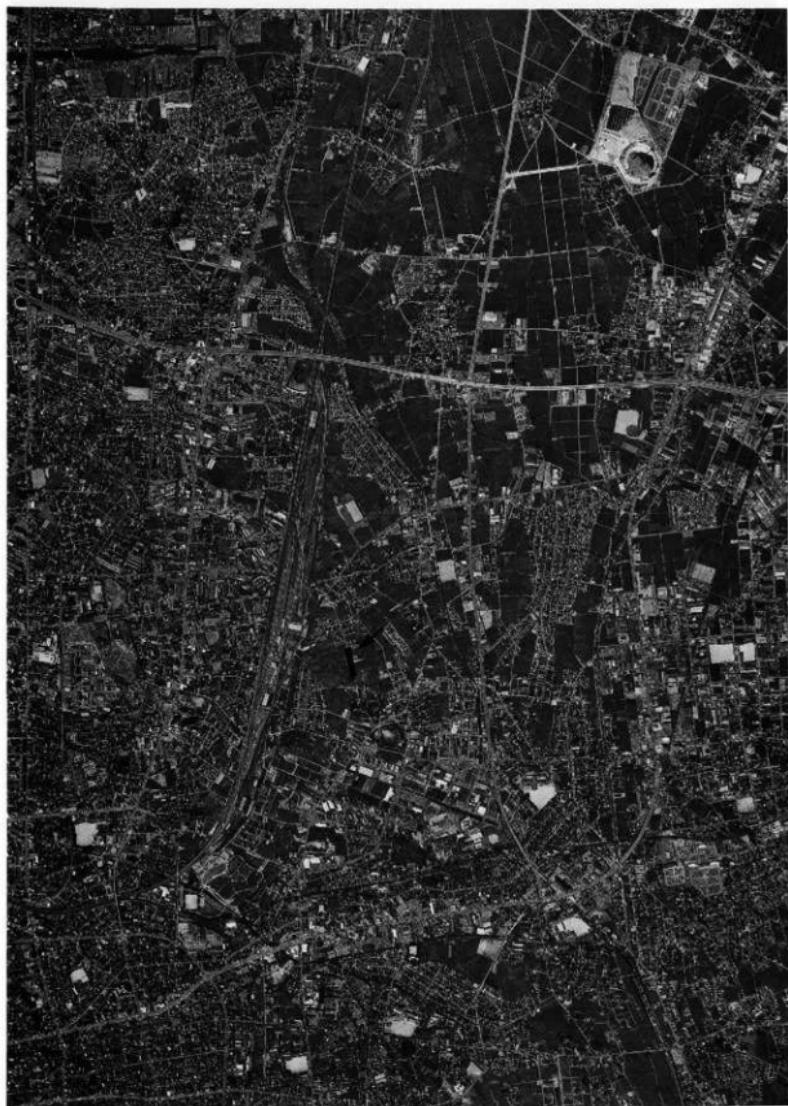
おいては圧倒的に須恵器が多い。9世紀後半において食膳具が須恵器から土師器へと急速に代替していく様相がみてとれる。浦田遺跡において須恵器の割合が高いのはこの遺跡の遺物が9世紀の中頃を中心としていることが原因とも考えられるが、後半代や10世紀代の遺物も含んでいることを考えると、やはりかなり高いと言える。

9世紀における須恵器の衰退化は、須恵器生産窯との立地など物理的関係や経営層との有機的な関係の如何よってその進度は異なっていたと言える。また、中富居遺跡、浦田遺跡双方とも土師器煮炊具の多さからみると一般村落に位置付けられるが、灰釉陶器、赤彩大型椀、墨書き土器などを出土している中富居遺跡の性格がこの違いの原因であることも考えられる。

(安達)

引用・参考文献

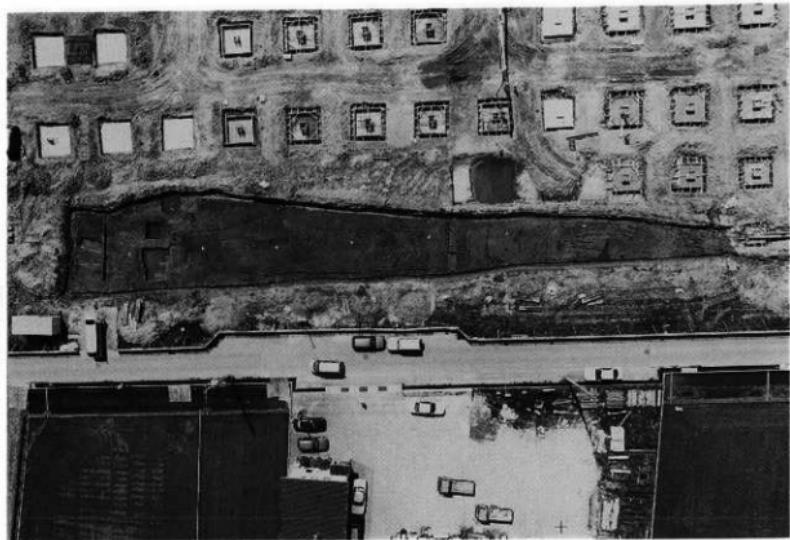
- 池野 正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』第11号 富山考古学会
1988 「射水丘陵における9-10世紀の須恵器窯跡」『大境』第12号 富山考古学会
1987 「越中における9世紀の土器様相」『北陸古代土器研究 第6号 <特集：北陸における9世紀代の土器様相>』北陸古代土器研究会
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 「北陸の古代土器研究の現状と課題 資料編、報告編」
- 内田亞紀子 1997 「越中における古代土師器の編年予察」「埋蔵文化財調査概要」財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所
- 宇野 隆夫 1989a 「考古資料による古代と中世の歴史と社会」真陽社
宇野隆夫、田中道子、春日真実 1989a 「富山大学考古学研究報告第3冊 越中上末窯」富山大学人文学部考古学研究室
- 押川 恵子 1991 「富山県富市南中田D遺跡発掘調査報告書」富山県埋蔵文化財センター
小林 高範 1997 「3.富山市米田大覚遺跡」『富山県埋蔵文化財センター所報』第60号 富山県埋蔵文化財センター
- 関清・河西 健二 「栗山椋原遺跡・南中田D遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡」富山県埋蔵文化財センター
高橋 真実 1995 「富山・北 木造跡」「木簡研究」第17号 木簡研究会
富山県教育委員会 1975 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」
富山県埋蔵文化財センター 1991 「富山県大鳥町荒畠遺跡発掘調査概要」大鳥町教育委員会
富山市教育委員会 1974 「富山市豊田遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会 1984 「富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要」
富山市教育委員会 1986 「富山市飯野新屋遺跡試掘調査報告書」
富山市教育委員会 1987 「富山市飯野新屋遺跡 主要地方道富山環状線工事に伴う古墳時代前期集落跡の調査概要」
富山市教育委員会 1990 「III 試掘調査 C 中富居遺跡」平成元年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要
富山市教育委員会 1995 「富山市飯野新屋遺跡発掘調査概要」
富山市教育委員会 1998 「富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要」
永井久美男編 1996 「日本出土銭銅観」 兵庫埋蔵銭調査会
藤田富士夫・駒見和夫 1981 「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』第7号 富山考古学会
藤田富士夫 1998 「I 遺跡の位置と環境」「富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要」富山市教育委員会
古川 知明 1995 「最新の発掘成果から」「富山市考古資料館報」No.27 富山市考古資料館
宮田 進一 1988 「越中瀬戸の窯資料(1)」「大境」第12号 富山考古学会
山口 長一 1986 「富山県高岡市美野下遺跡調査概報—高岡古府宿舎建設に伴う調査—」
吉岡 康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館



航空写真（1992 H4 国土地理院）



調査区 (1~4区)

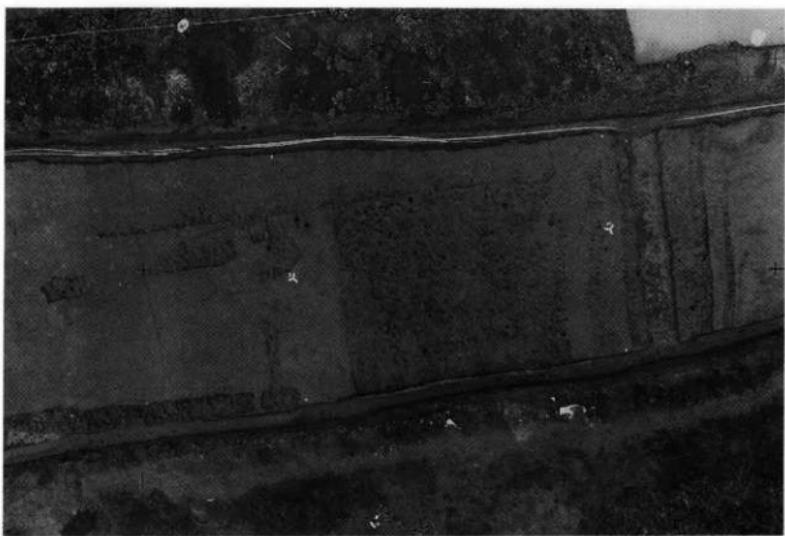


1.



2.

1. 第1・2区上層 2. 第1・2区下層



第1区



第2区



1. SD03(下)



2. SD03土層断面



3. 第1区南側土層断面



4. 第1区西側土層断面



第4区 a地点 土坑群完掘状態（南より）



第4区 a地点 SD20、SK04・07 遺物出土状態（南より）



第4区SK02・03 遺物出土状態（西より）



第4区SD18 遺物出土状態（東より）



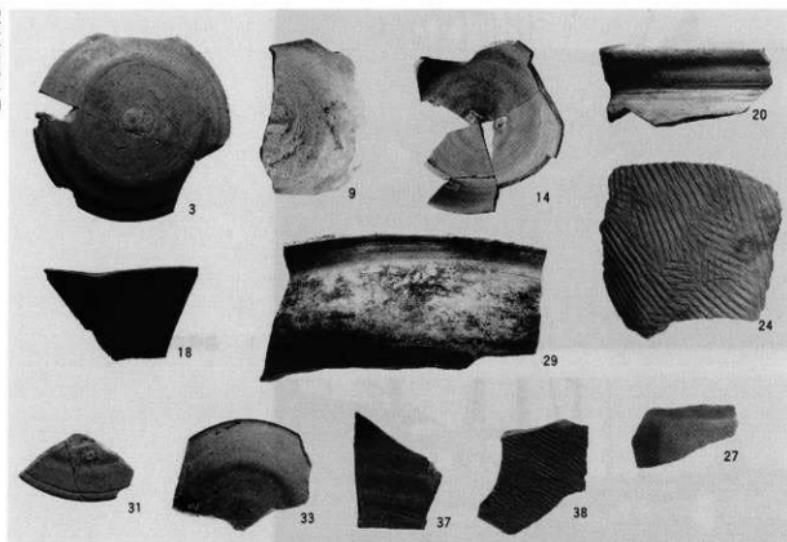
1. 遺構掘削、測量



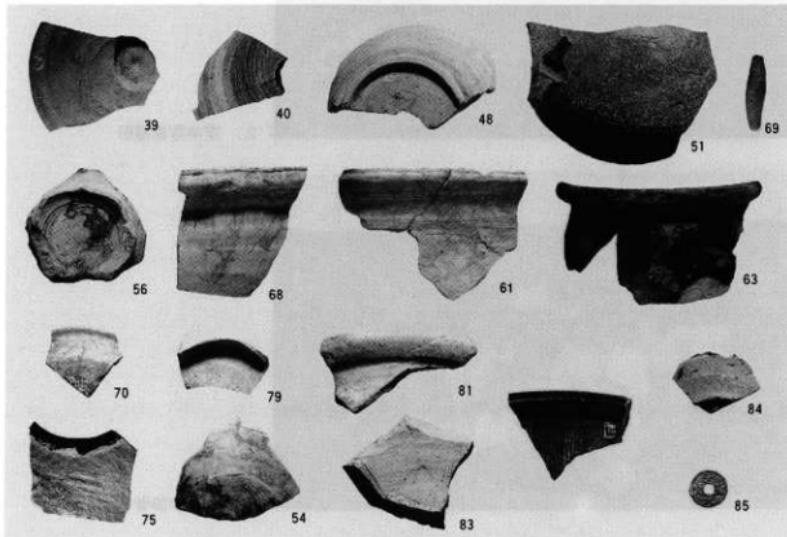
2. 空中写真撮影



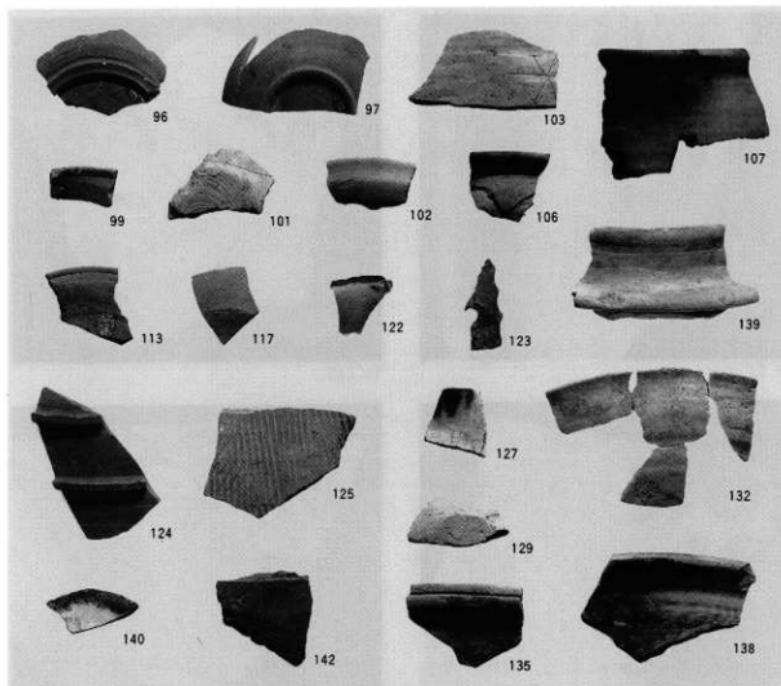
3. 調査参加者スナップ



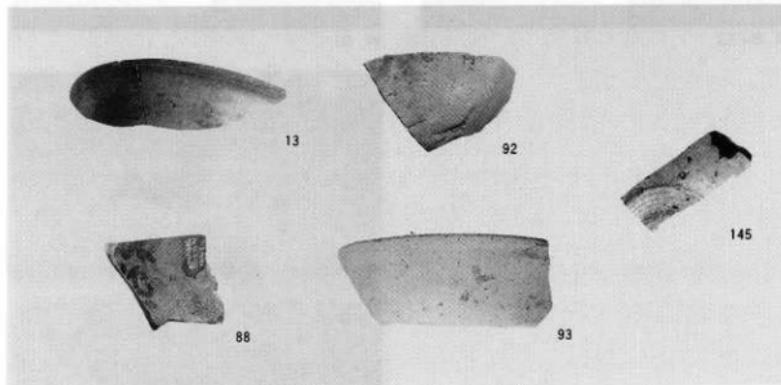
第1・2区 下層・上層遺構出土遺物（スケール約3分の1）



第1・2区 包含層出土遺物（スケール約3分の1）



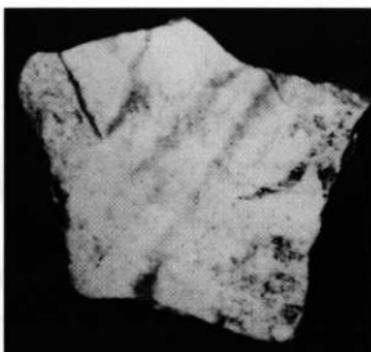
第4区 遺構・包含層出土遺物（スケール約3分の1）



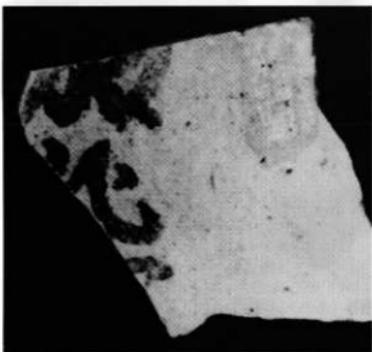
墨書土器（スケール約2分の1）



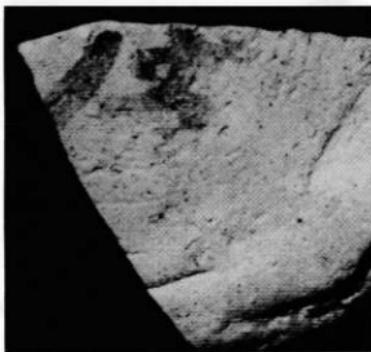
13 □



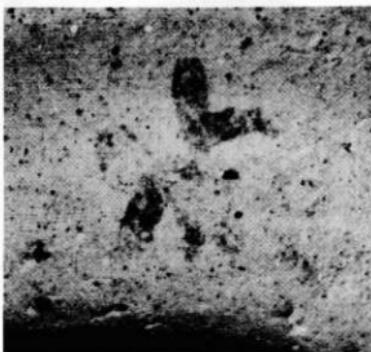
55 □□



88 加△□□



92 庄△



93 右△

墨書土器拡大写真（赤外線写真）

報告書抄録

書名	富山市中富居遺跡発掘調査報告書						
副書名	大型ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
編著者名	近藤顯子・小黒智久・安達志津						
編集機関	富山市教育委員会						
所在地	〒930-0803 富山県富山市新桜町7番38号 TEL 076-443-2138						
発行年月日	西暦1999年1月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
中富居遺跡	富山市上富居大 百刈237番外	16201	36° 42' 20"	137° 14' 20"	19980330 ～ 19980608	695	大型ショッピングセンター建設に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中富居遺跡	集落跡	平安	溝・土坑・ピット	須恵器、土師器	墨書き土器5点出土		
		中世	溝・土坑	土師質土器、珠洲焼			

富山市中富居遺跡発掘調査報告書

－大型ショッピングセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

1999(平成11)年1月31日発行

発行 富山市教育委員会

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803

富山市下新本町5番12号

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-4246

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

印刷 株式会社チューイツ